

## 新刊紹介

編集委員会

『美唄山の植物 ハンディ図鑑』. 新田紀敏 (著), B6判. 112頁. 2019年8月10日. エコ・ネットワーク. 800円+税

本書は本会会員である著者の職場に近い美唄山の登山コースで見られるシダから始まる維管束植物約200種の解説付きのカラー図鑑である。巻末の植物リストには363種が掲載されている。

美唄山は美唄市・芦別市・奈井江町の3市町の境界にある標高987mの山である。美唄山は登山ガイドなどには紹介されていない山で、筆者は未だ登った経験はないが、本書によると、標高が1,000m近いので尾根筋には高山植物があり、岩場の植物なども見られ、低地からの登山中に変化に富んだ植物がみられるようなので、一度行ってみたいと思う山ではある。美唄市民に利用されている山と紹介されているが、登山口から山頂まで4.4km、片道3時間は筆者にはちょっときつい。

本書のこの山の植物相についての紹介部分を引用すると「美唄市の東側の山地は森林が広がり、北海道内陸部・多雪地帯の典型的な植物が見られ、尾根上では少ないながら高山植物も見られます。また、わずかながら太平洋側の気候の影響を受けており、多様性を増しています。」363種の植物の巻末のリストアップは筆者の丹念な調査の証左である。

『植物園の世紀 イギリス帝国の植物政策』. 川島昭夫 (著), 46判. 239頁. 2020年7月10日. 共和国. 2,800円+税

筆者は1999年に山川出版社より世界史リブレットのシリーズで「植物と市民の文化」を著わして、イギリス国内における市民のガーデニングの歴史を中心にキュー植物園とのかかわりや、市民や貴族の庭園、ヴィクトリア朝の花の文化などを取り上げた著作であった。

本書はさらにイギリス国外に視野を広げ、世界に数多くの植民地を所有していた頃のイギリスの国家戦略としての植物と植物園とのかかわりを取り上げている。

本書の構成をみると第1章 植物帝国主義、第2章 重商主義帝国と植物園、第3章 カリブ海の植物園、第4章 ブルーマウンテンの椿—カリブ海の植物園2、第5章 インドの植物園と大英帝国、第6章 植物学の同胞—インドの植物園と大英帝国2、第7章 戦艦バウンティ号の積み荷、第8章 海峡の植物園—ペナンとシンガポールとなっている。

当時のイギリスは資源植物の国外依存からの脱却を図るため、あらゆる植物を帝国領土内に集めるという「植物帝国主義」を掲げ、これを強力に推進したジョセフ・ヴァンクスはよく知られている。植民地獲得でスペイン、ポルトガルやオランダに大きく遅れたイギリスであったが、領土内の植物園として1763年にカリブ海のセント・ヴィンセント島に初めて植民地植物園が置かれ、多くの資源植物が世界から集められ栽培された。

フランスもイギリスに次いで1775年にアフリカのマダガスカル沖のモーリシャス島に王立の最初の植民地植物園を設置するが、イギ

リスに先駆けて設置されたポルトガルやオランダの植民地植物園も随時取り上げている。

同じ 1775 年にイギリスは西インド諸島ジャマイカに二つ目の植民地植物園を設置する。およそ 700 の砂糖プランテーションをもつ「砂糖の島」として、18 世紀のイギリスにはかりしれない「西インドの富」をもたらしていたのはこの島であった。

“この英領西インドこそが、アフリカ西岸から西インドへ奴隷を輸送する奴隷貿易、北米植民地と西インド間のラム酒・糖蜜と食料の交易、本国へ輸入され精製された砂糖の再輸出、この三角貿易をイギリスの海運業が独占してこの貿易網のうゑにイギリス経済が立脚した。西インドはまさに重商主義帝国の中軸に位置していたのである。(書中引用)”

世界に展開したイギリス植民地植物園を挙げると、北米(ジョージア)、ジャマイカ(バース植物園/ヒントン・イースト庭園)、大西洋(セント・ヘレナ島植物園)、インド(マドラス/カルカッタ)、インドネシア(ペナン島植物園/シンガポール植物園)などが次々に設置されて行く。本国イギリスでは十分に育てられない、産業の発展には欠かせない資源となる植物を育てるための重要な基点として植物園ネットワークを形成し、イギリスの帝国主義政策を支えたとしている。

本書は、ヴァンクスに象徴されるイギリス国家としての植物戦略と、現地で植物園を設置し、世界中から有用植物を集めて栽培・量産して、これを支えた植物学者や軍人・官僚・民間人など多くの人たちの挿話を交えて記されている。

このように、本国と植民地のあいだ、あるいは、北米、南米、インドや東南アジアと異

なる地域の植民地間で植物が移植されれば、それぞれの土地の生態系は乱され、それによって失われた生物多様性もあつたに違いないし、現代における地球規模の環境悪化や人と物の大量移動に伴う生物多様性の低下は、本書で取り上げられたヨーロッパ諸国における 17-18 世紀の植民地政策がその濫觴となるろう。

『北大総合博物館のすごい標本』. 北海道大学総合博物館(編), A5 判. 240 頁. 2020 年 3 月 6 日. 北海道新聞社. 2,300 円+税

本書は北大総合博物館が一般読者向けに、収蔵する標本を中心に同博物館を紹介するために出版した恐らく初めての試みであろう。

本の構成は、陸上植物、菌類、藻類、昆虫、魚類、無脊椎動物、古生物、岩石・鉱物、考古、学術資料アーカイブ・科学機器の順に、各分野の教師陣が分担執筆している。各分野には約 20 ページが割り当ててある。

このうちの陸上植物について概要を紹介する。同博物館の陸上植物標本庫は国際規約で SAPS と呼称されるが、標本庫は宮部金吾によって 1903 年(明治 36 年)開設され、その後充実されてきた経緯の説明がある。

また標本庫の特徴として歴代の宮部金吾、工藤裕舜、館脇操、高橋英樹等の採集による千島列島・樺太地域の植物研究に必須の標本群が充実しているとする。

個々の収蔵標本についてはタイプ標本を含む特徴的な標本の画像とエピソードを交えた解説がセットになっている。取り上げている植物標本を列記すると、クラークとペンハローの地衣類標本群、初代学長佐藤昌介採集のエゾゴマナ、オオバナノエンレイソウ、エゾエ

ンゴサク、テシオコザクラ/タイプ標本、イトイバラモ/タイプ標本、ウリュウコウホネ/タイプ標本、レブンアツモリソウ/タイプ標本、ユウシュンラン、イチヤクソウのアルビノ株。

また、宮部金吾と 館脇操の略伝があり、標本作成に重要な標本固定テープも取り上げていて、気楽に読める内容となっている。

おわりに、当博物館の湯浅教授の本書に寄せたメッセージの一部を引用する。

「北大総合博物館は、総合大学の総合博物館である。札幌キャンパスの北部にある札幌農学校第2農場、函館キャンパスにある水産科学館を含め、人々の知的好奇心を開く扉がいくつも用意されている。「モノ」と「コト」に注目して編んだ本書の読者は、既にその扉を開いている。扉の向こうには、関心のある分野の知識を深められたり、新しい分野へと視野を広げたり、幼い頃に憧れて夢中になった分野への思いを再び抱く機会が待っているかもしれない。あるいは、博物館にさまざまな形で関わる「ヒト」の活動への関心が芽生えるかもしれない。博物館への関わり方は自由である。建物の意匠を味わったり、カフェやショップで過ごす居心地のよい時間を見つけていただくのもよい。本書をきっかけに、それぞれの関わり方を見つけ、北大総合博物館を味わいつくしていただくことを願っている。」

北大の総合博物館は入館が無料で幅広く自然物の展示物を見ることができるところから、多くの市民や内外の観光客で賑わっていたが、新型コロナウイルス (COVID-19) の影響で現在この光景は見られない。

(吉中)

『Flora of Japan, Volume IVa』、『Flora of Japan, General Index』. 岩槻邦男・D. E. Boufford・大場秀章 (編), A4判・448・240頁. 2020年10月20日. 講談社. 40,000円+税・12,000円+税

本書は専門家向けの英文書で、一般の読者が目にするにはまずない。いわゆる植物誌で読み物ではない。したがって興味がわかない読者は、この後を読む必要はないが、少し植物に関心のある人なら名前くらいは知っておいて損はない書物である。「FoJ 完結したんだってね。」と言えば、相手は「こいつできるな。」という目に変わること請け合いである。

1993年から始まったシリーズの最終巻がついに出版された。本書はイネ科、カヤツリグサ科という厄介な科を含むため、発刊が延び延びになっていたのであろう。5,500種にのぼる日本の野生植物 (シダ+種子植物) について、分類学的情報を網羅するという壮大な構想のもとに発刊が始まったものの、2000年までに4巻、世紀をまたいで4巻の発刊となった。はじめは2年に1巻程度のペースであったが、5年、10年とペースが落ち、前回のIVbが出たのは2016年3月なのでそれからでも4年半かかっている。実に27年の歳月をかけた出版がようやく完結した。

その間には植物分類学の世界も様変わりし、体系がAPGへと移行したこともあって、なくなってしまった科もある。しかし、分類学的情報の集積を目指しただけのことはあって、全種の形態記述の前にシノニムリストが高い精度でつけてある。本シリーズは8分冊になっており、正直引きにくいものだったが、General Indexでスムーズにたどり着くことができるようになった。

(新田)